

## 論文

# Heathcliff 論 2

—3つの transformation—

服 部 茂

### 要 旨

*Wuthering Heights* (1847, Emily Brontë) の主人公 Heathcliff は、3度の transformation がある。Earnshaw 氏の死後 Hindley が跡を継ぎ Heathcliff を家族の一員から単なる労働者への降格、失踪後外見を変え財産を築いて the Heights への再度の出現、そして Catherine の死後、人生観の変化である。Hindley と Catherine もそれぞれ transformation を果たし、直接 Heathcliff のその後の人生に影響を与えた。この transformation は、Heathcliff の人生においてどのような影響を及ぼしたのか。一度目の少年期では、辛く厳しい環境と不運が絶妙なタイミングで彼の人格形成と人生の方向に影響を与えた。二度目は、教育と教養を身につけることにより言語能力を獲得した Heathcliff は、かつての人物ではなくなる。知的さと外見を武器に彼を取り巻く人間関係において自分の意のままに人を誘導し人生を展開していく。三度目は、Catherine の死後、Heathcliff は自分の人生観、死生観を確定するのである。Catherine の魂を追い求めるあまり現世と精神世界を行ったり来たり葛藤するのである。この小論では、Heathcliff の3つの transformation を検証し、それがどのように彼の人生と関わっているかを考察する。以上の点を踏まえ、運命、運の観点から彼の人生を解釈する。

キーワード：Heathcliff, transformation (変身), 人生, 運命, 不運, 世間, 世俗的

## I

Heathcliffは、その出自が明らかにされていないため不明である。Heathcliffの強い物言いや乱暴で残酷な振る舞いが際立つためあたかも悪魔であるかのような印象が残る。Isabellaは、“Is Mr Heathcliff a man? If so, is he mad? And if not, is he a devil?” (XIII)と問う。しかしNellyは、“He’s a human being.” (XVII)と言い「人間」であることを強調する。しかし、Nellyのこの強い肯定がかえってHeathcliffを何か謎めいた含みをもたせる。Heathcliffの存在や出自は、古くから様々な角度から論じられている。Charlotteは、“a man’s shape animated by demon life—a Ghoul—an Afreet”<sup>1</sup>とHeathcliffを評した。これは、出版当時の初期に多数を占めたHeathcliff像である。作中から描き出された彼の印象がその根拠にある。また、人物形成についてMaughamは、“Emily gave Heathcliff her own masculinity, her violence and her savage temper.”<sup>2</sup>とHeathcliffは、作者Emily自身の性格の投影だと述べた。Emilyの生い立ちや生活環境からHeathcliff像を求める意見である。Maughamと対照的に、バタイユは、「作者の夢想から生まれた人物で、作者の論理から生み出された人物ではない」<sup>3</sup>と述べる。他にHeathcliff像のモデルを推測する意見もある。Heathcliffは、Emilyの兄であるBranwellだとする意見は、よく知られている。酒に溺れ自堕落な彼の生活がEmilyに影響を与えたというのである。これらは、Heathcliff論の代表的な意見である。いかに論じられようと彼は、人として描かれており地に足を着け議論しなければならぬ。そうでないと彼の人生がどのようなものであるか、他の論点に目が移るあまり見逃してしまう。

そもそもHeathcliffは、両親もいない孤児としてLiverpoolで拾われ、地主階級であるEarnshaw家で育てられる。しかしながら、Heathcliffが養子として入った家は、屋敷の造りからくる異様な雰囲気と個性の強い住人が集う。彼は、歓迎された子どもではなかった。短い期間であるが、少年期のHeathcliffは、主人であるEarnshaw氏の庇護のもと有利に生活をする事ができた。その間にHindleyとの関係を悪化させる期間でありHeathcliffの生き方を決定する切っ掛けとなる。その要因となるのは、Hindley, Catherine, Heathcliffのtransformationである。Hindleyのtransformationは、父親の死後である。屋敷を継ぐため帰郷するとNellyは“He had grown sparer, and lost his colour, and spoke and dressed quite differently.” (VI)と言うようにその人物像を以前より悪い方に変える。Catherineのtransformationは、the Grangeでの5週間後帰宅した際、表面的ではあるがladyのたしなみを知る人物へと変わった。HeathcliffとCatherineのtransformationは、Heathcliffの生き方に強く影響を与える。Heathcliffの憎悪の気質は、Hindleyのtransformationの

悪影響からである。新たに the Heights を継いだ Hindley から教育を奪われ報酬も受けず、何も生み出さない労働者へ追いやられ弱者となった。Nelly は、Hindley の扱いは “make a fiend of a saint” (VIII) と証言する。これが Heathcliff 最初の transformation である。Heathcliff の生活は、優越的な生活から一変した。

そのような中で、いくつかの不運が重なった。Catherine と the Grange で Linton 家の家庭を垣間見た光景は、彼にとって特別な意味を帯びた。結論を急げば、この Linton 家との出会いは Catherine の人生を変えることになり、同時に Heathcliff に疎外感、劣等感を与え孤独にさせ、さらに Edgar との結婚という Heathcliff に人生最大の不幸を与える。一方、Heathcliff は、ほぼ同年代の洗練され上等な人物を見ることで Hindley から与えられた負の思考から脱却する切っ掛けとなり得た。Heathcliff は、確率は低いが自ら更生させることが可能であった。Heathcliff は、自分を高めようとする。彼は、“I’d not exchange, for a thousand lives, my condition here, for Edgar Linton’s at Thrushcross Grange.” (VI) と言うが本心は違う。正直に胸の内を明かす。

‘But, Nelly, if I knocked him(=Edgar) down twenty times, that wouldn’t make him less handsome, or me more so. I wish I had light hair and a fair skin, and was dresses, and behaved as well, and had a chance of being as rich as he will be!’

(VII)

自分を客観的に捉えた結果、自分の現状を認識した。社会性が芽生えたのである。ここでいう社会性とは俗世間の価値観を意味する。彼は、それを求めたのである。自分を変えたいと切望する。しかしながら、世間の仲間入りを希望し、更生できる機会がこの時が最後であった。そして、Heathcliff にとって不運な出来事が再度重なる。第7章において Heathcliff は、Catherine の transformation の結果、the Grange から戻ってきた Catherine に戸惑い、うまく意思疎通が図れず二人の気持ちにすれ違いを起こす。一晩、Heathcliff は、一人になり冷静に考え直し彼は心を改め Nelly に自分の行いの非を反省した。Nelly は喜んでそれを受け入れ彼をおだて、励まし小奇麗な身なりにしてやる。「いい子」へと変わりその気分で世間の行事である Catherine, Edagr, Isabella がいるクリスマスパーティへと参加する。彼が扉を開けたその瞬間 Hindley と出くわす。大きな分岐点となる不運である。「いい子」になっている Heathcliff が気に入らず Hindley は “Begone, you vagabond! What, you are attempting the coxcomb, are you?” (VII) と暴言を吐き追い出してしまう。Hindley の暴言は、Heathcliff には凶星であった。つまり、おまえなどは、この世に必要な人間と烙印を押され、そのような人物が着飾るとはお笑いざたと屈辱を味わうので

ある。しかも、屋根裏部屋という牢獄の中に入れられてしまう。Heathcliffは、自分の行いの非を素直に認め改心したときだけに一層傷は深い。もしかしたら、世間の一員になれるかもしれないという機会を逃したことは決定的な出来事である。不運がHeathcliffの人生に影を落とした。そうするとHeathcliffは、自暴自棄になるしかなく自分を徹底的に墮落させるのみである。Nellyは、“(He) became daily more notable for savage sullenness and ferocity.” (VIII) と彼の荒れた様子を述べる。益々墮落して身体も不衛生になり不快感を与えることで周辺に対して反発をして自分の気持ちを表明するしかないのである。限りない墮落は、Heathcliffの抗議を意味する。Hindleyの下でHeathcliffは、人間として成長する機会を阻止された。その結果、CatherineはEdgarの方に好意を抱きHeathcliffから離れる。Catherineのtransformationの効果がでたのである。Edgarの方がHeathcliffよりも成熟した人物に見えるのである。つまり、Edgarの態度、言葉遣い、風貌は魅力的に映るのである。Catherineは、俗世間へと入っていく。Heathcliffは毎日の激しい労働の中、自分自身を高め人生を深く考えることもできず、生産的な発想は思考停止状態であった。ルソーは、『エミール』の中で「生まれたときから他の人々のなかにほうりだされている人間は、だれよりもゆがんだ人間になる」<sup>4</sup> と言う。Heathcliffの不幸のひとつは、正しい人間になるよう導かれなかったことにある。これは、孤児であるが故の運命であろうか。HindleyとCatherineのtransformationは、Heathcliffの人生の方向を決定づけた。

## II

成人したHeathcliffは、the Heightsを後にしてその3年後、人物像を変え世間の仲間入りをした振りをして帰ってきた。彼は、世間に出て人間を深く洞察し、再び世に姿を現した。二度目のtransformationである。Heathcliffは、首尾よく世間体を身につけて来たのである。自分を苦しめた世間思想を徹底的に批判する。その彼の外見の変貌振りにNellyは驚くばかりである。EdgarでさえHeathcliffの外見が自分と同じ世間観ではないかと一瞬感じ取る。Nellyは、“My master’s surprise equalled or exceeded mine; he remained for a minute at a loss how to address the ploughboy.” (X) とEdgarのその驚きの表情からもその衝撃がわかる。Edgarは、Heathcliffの対応に怯む。人の外見からくる印象は大きいのである。Heathcliffの外見の変貌振りにNellyは次のように描写する。

He had grown a tall, athletic, well-formed man, . . . His upright carriage suggested the idea of his having been in the army. . . it looked intelligent, . . . and his manner was even dignified, . . . (X)

この Heathcliff の肉体的外見は、世間が評価する見た目である。節制をして鍛えられたその外見から自信が漲る。世間に通用する紳士としての風格である。世間は、認めるのである。Isabella は、Heathcliff が帰ってきた早々に彼に惹かれるのである。Isabella は Heathcliff の肉体に性的な魅力を感じ恋をしてしまう。<sup>5</sup> 俗世間である Isabella は、Heathcliff の肉体と外見に盲目になってしまう。それは Edgar が Catherine を好きになった動機の一つと同じである（彼の場合は Catherine の美に魅力を感じた）。Hindley も地主階級の長男ということで Linton 側に属する。Heathcliff は Hindley を金という餌で陥れ大いに弄ぶ。Heathcliff は、金権でもってあっさり墮落させてしまう。彼は、世間を知ることによってこの金権の力を必要とした。金は、人を簡単に操る道具である。だから、Heathcliff は財産にこだわった。この金権で弁護士を買収 (XXVIII) し、墓守にもお金を握らせている (XXIX)。<sup>6</sup>

Heathcliff の transformation について Eagleton は、“Just as Hindley withdraws culture from Heathcliff as a mode of domination, so Heathcliff acquires culture as a weapon.”<sup>7</sup> と教養の獲得を述べる。Eagleton の言う教育と教養は何か。Eagleton の言葉を借りれば教育と教養を獲得した Heathcliff は、コミュニケーションスキルと世間思想を用いて社会復帰する。Heathcliff は、教育と教養によって身に付けた力は、取り引きと交渉力である。言葉をやうまく操り自分の思うがままに相手を操る力である。言語運用力は、知的な力が必要である。さらに、相手に対して対等に話し、説得力のある話術は教育と教養を基盤とする。先ず、Heathcliff の情報収集力を指摘したい。

1. I told him as much as I thought proper of her illness, and he extorted from me, by cross-examination, most of the facts connected with its origin. (XIV)
2. Though I(=Nelly) would give no information, he discovered, through some of the other servants, both her place of residence and the existence of the child. (XVII)

情報を相手から引き出す力。1 は、Heathcliff の質問力が伺える。忍耐強さと執着心で Nelly は根負けする。2 は、Nelly に情報提供を拒まれ他の召使いから情報を得た際、Nelly にはお金での解決は通用しないので他の召使いに、金の力を利用した可能性は高い。だとすれば、効果的に無駄なくお金を利用したのである。次に詳細に Heathcliff の言説の代表的な例を挙げて検証する。

3. ‘I swear that I meditate no harm; I don’t desire to cause any disturbance, or to

exasperate or insult Mr Linton; I only wish to hear from herself how she(=Catherine) is, and why she has been ill; and to ask, if anything that I could do would be of use to her.’ (XIV)

4. ‘Just imagine your(=Cathy’s) father in my place, and Linton in yours; then think how you would value your careless lover, if he refused to stir a step to comfort you, when your father, himself, entreated him; . . .’ (XXII)
5. . . . he(=Heathcliff) smiled when he met her(=Cathy’s) eye, and softened his voice in addressing her, . . . (XXI)

3は、安全性を基盤に強調して相手を安心させ、誠実さを全面的に出すことによって、Nellyの情に訴えるやり方である「懇願型」。4は、現状認識と相手の立場をリアルに用いて強調し論理的にしかも具体的に論ず「説得型」である。5は、これは言葉を発したのではないが言外の意味を含むコミュニケーションである。表情で相手に伝える nonverbal communication である。だから、普段は見せない表情をつくり相手に意表を突き油断させる。これは「役者・演技型」である。Heathcliffは、そのときどきの状況や相手に合わせて、話の内容に緩急を織り交ぜる。主なHeathcliffの言説を検証したが、つまりHeathcliffは、様々の状況に対して柔軟に相手と渡り合うことができるのである。それは、彼がtransformationを経て身に付けたとされる教育や教養が具体的に成果として披露される場面である。その話術は、正論を会話の中に織り込むことにより反論を最小限に押さえ込み最大の成果を相手から引き出すのである。Cecilも“Heathcliff, with his brusque manner and his burning eloquence”<sup>8</sup>と彼の雄弁さを指摘する。一方、娘のCathyも自分の気持ちをはっきりと表明して饒舌である。彼女は、子どもの域を超えておらず、その言葉の力は完成されていない。それゆえ内容も一本調子である。激しい感情に訴えることで自分の思いを伝える。だから、Nellyはしぶしぶ動くことになる。Heathcliffは、言葉の中に強い印象を植え付け、その言葉が独立して人の心を支配し遠隔操作も可能にする。その言説は、裏づけされ論理的に構成されており確実に相手を誘導する。そこに世間受けをする、いわゆる人間愛と情を取り入れあくまでも味方であると強調して相手を欺く。

交渉相手は、Nellyたちだけではない。Heathcliffの雄弁さは、Lockwoodがthe Heightsを訪れた際にも発揮される。

6. (He) introduced what he supposed would be a subject of interest to

me(=Lockwood), a discourse on the advantages and disadvantages of my present place of retirement. I found him very intelligent on the topics we touched; . . . (I)

7. Scoundrel! He(=Heathcliff) is not altogether guiltless in this illness of mine; and that I had a great mind to tell him. But, alas! how could I offend a man who was charitable enough to sit at my bedside a good hour, . . . (X)

例6では、Lockwoodのお気に召す話をして彼をいい気分にさせている。Lockwoodは、再訪を望むまでに話が弾む。Heathcliffは、二人が共有できる話題を選びLockwoodの質問にも理路整然と答えていたことが伺える。いい気分に気持ちを高揚させるためには、少なくともある程度のサービス精神も必要である。7は、HeathcliffがLockwoodを見舞う場面である。LockwoodはHeathcliffのことを根に持つ。Heathcliffは、少なからず敵意を感じている相手の負の感情を打ち消し、好意にさえ転換させる話術である。人の気持ちを読み配慮のある会話が推測される。Heathcliffは、教養をうまく会話のやり取りの中で実践している。Lockwoodの憎しみの表明もさせず反論を許さない。Lockwoodは、軽率なところもあるが知的な紳士である。そうした大人を対象にHeathcliffは、自分の話術を駆使し、巧みに自分側に有利に運ぶよう言葉を使い分ける。Heathcliffの少年期において印象的な場面がある。Heathcliffの馬がびっこになりHindleyを脅して自分の馬と交換させる場面がある(IV)。これは、正面きってHindleyと対峙するのではなくEarnshaw氏に最悪されている有利さを楯にしてHindleyに迫り言葉だけで欲しいものが手に入った。一方、Hindleyは暴力でもってそれに報復した。Heathcliffは、そのしたたかさは少年のころからあったのである。Heathcliffの言説の中に世間の情を含ませ相手を誘導する。Heathcliffの変貌は外見だけでなく言葉という武器を持ち理論武装する。復讐の過程において偶然や運も左右されるが、教育と教養により反世間のために多面的な人格を獲得した。Heathcliffのtransformationは財産を築いたり外見を変貌させただけではない。

### III

財産、不動産は世俗的なものを象徴する。世間の欲望、羨望、憧れである。その世俗的なものを所有しなければHeathcliffの主張は空論に帰する。まず、Heathcliffは、世間の頂点に立つ必要があったと考えるのである。地主階級にありがちな偽善性を見抜き、理想とされる優しさ、上品、無私、慈善精神を嘲笑う。Heathcliffは、暴言を吐き、その表現は暴力的で、鉄拳も振るい非情になる。KettleやEagletonが言うようにHeathcliffの不幸、不

満は社会制度のシステムの影響と無関係ではない。筆者もその議論を支持する。だがそういった側面もある上で、別角度から論ずればHeathcliffの個人の問題でもある。故に、Heathcliffが少年期に体験し形成された人格が世間の良心に対して不信となりやがて憎悪へと転換されるのである。バタイユは、「善の世界，おとなたちの世界に反抗し，その情容赦のない反抗を通じて断固として悪の側に与しようとする，子供の真理という直接的な真理を具現している」<sup>9</sup>とHeathcliffの思想を述べる。その反抗の動機となったのはthe Heightsの充満した悪という空気であった。Eagletonは，“Heathcliff’s mere presence fiercely intensifies that system’s harshness, twisting all the Earnshaw relationships into bitter antagonism.”<sup>10</sup>と述べる。つまりHeathcliffのthe Heightsでの存在は，元来the Heightsの内部に潜在的にあった暴力の要素を明確にしたということである。

Catherineの死後，Heathcliffは彼女の中しか世界は存在しなくなってきたのである。三つ目のtransformationである。晩年のHeathcliffは，もう一つの欲望を同時に追っていたのである。それはCatherineとの魂の結合であるのは周知のとおりである。しかしながら，この現世と魂（精神）の世界は両立できない。だから所有した財産を放棄しなければならないのである。Heathcliffは，まだ現世を完全に払拭しきれていない。現世と精神の世界へと行ったり来たり葛藤する。Heathcliffは“I have not written my will yet, and how to leave my property. I cannot determine! I wish I could annihilate it from the face of the earth.”(XXXIV)と現世の未練を語る。遺言は，現世の魂である。この世から肉体がなくなっても遺言という名の魂でその言葉が現世の人を操る。Heathcliffは，かつてCatherineがEdgarを選択したときとは違う。この世俗的なものよりCatherineの魂を選択したのである。Heathcliffは，裏切らなかつたのである。それにより，Catherineの魂はHeathcliffを死の世界へと誘う。Nellyは，Heathcliffが断食をしている理由が分からない。彼女は，現世でしか生きていないからである。だから，Heathcliffは，幸福な死に方をしたのである。彼の言う“my heaven”(XXXIV)へ到達したのである。

#### IV

Heathcliffは，自分の行為を後悔しないのは当然である。これまでの人生の行為を後悔することは，自分の人生を最後に否定してしまうことになるからである。Heathcliffは，自分の人生に結論づけはしていない。“as to repenting of my injustices, I’ve done no injustice, and I repent of nothing—I’m too happy, . . . (XXXIV)”と言う。しかし，彼はCatherineの魂を追い求めるながら虚無感に苛まれる。

... I get levers and mattocks to demolish the two houses, and train myself to be capable of working like Hercules, and ... My old enemies have not beaten me. . . (XXXIII)

これは、懸命に生きてきた Heathcliff の叫びである。壮絶な苦勞を語る一方で、自負心がにじむ。Heathcliff は、自分の人生に明確に後悔を示さないが、このセリフには、一種の懺悔とも読み取れる。それは具体的に世間に謝罪をして和解を申し出るものではない。Heathcliff の苦悩、努力、野望を示す。現世と別れるための最後の足掻きである。

Heathcliff は、自分の人生の運命について表明しない。だが、Heathcliff の作者 Emily は、運命について次のように記している。

運命の打撃に 悶え苦しみながら  
引き裂かれた不運の人が 運命の憎悪に  
おのれの忍耐を取り組ませ つねに叛逆のこころを抱きつつ  
顔には笑みを見せざるを得ない世界は<sup>11</sup>

人生には、運命がある。その運命がいかなるものであるかは分からない。Emily の詩は、Heathcliff の人生の運命を代弁するものである。Heathcliff の運命は、彼を憎悪へと向かわせた。運命が導いた人生は、忍耐と反逆であったと言える。彼は3度の transformation を経た。彼は、その苦しい過程を明らかにしない。そこには、Heathcliff の世間に対して妥協しない彼の意地である。影知れず耐える彼の姿があるのである。筆者は、以前 Heathcliff の少年期のころの境遇について述べた際、Earnshaw 氏の出会いを彼の運命と位置づけ引き受けなければならない境遇を宿命と論じ弱者として生きる選択をしたと述べた。<sup>12</sup> 人は、運命には抗えない。その運命をどのように引き受け、それをどのように再構成して自分なりに心に折り合いをつけるかである。Heathcliff の少年期の恵まれない生活環境は、その後の人生に世間との溝をつくった。彼は、その世間と落とし前をつける人生となった。

人生は、自分が行った正・負の行為に対してどのような言い訳を立てるか。人生の成り行きをどう解釈するかである。プラスと考えるかマイナスと考えるかである。たとえば Nelly は、己の立場を嘆く Heathcliff に “You(=Heathcliff)’re fit for a prince in disguise. Who knows, but your father was Emperor of China, and your mother an Indian queen, . . .” (VII) と肯定的に解釈を施す。人生はどう解釈するかを Heathcliff に説く。続いて Nelly は、 “Were I in your place, I would frame high notions of my birth; and the thoughts of what I was should give me courage and dignity to support the oppressions

of a little famer!” (VII) と説き運命を自分に都合よく解釈せよと提案する。そうすることで人生が開けてくると。つまり「運命」は自分の行いで変えるものだというのである。人生の中には良い、悪い出来事は日常である。その出来事をどのように解釈するかで今後の展開が分かれる。その解釈はその人の性格や物の見方に左右される。

Heathcliffの人生から見えてくることは人間の闇や弱さ、欲望、虚無そしてその背後にある社会の影響、生き方である。Eagletonは、Heathcliffの存在を“*He is a touchstone of others' responses.*”<sup>13</sup>とも述べた。Heathcliffは、Earnshaw家とLinton家の縁のない人物である。だからこそHeathcliffを取り巻く人物の気持ちや感情、考えが透視される。確かにHeathcliffの個々の行為は、社会通念において肯定しがたい部分はある。またLinton家のその正統的で保守的で、偽善的なところを賞賛したり非難するのも違う。なぜそのようなことが起きるのかその動機に着目すれば人間のもともとの本性の一端を知ることができる。人間性を文学から抽出することによって奥深い人間観察ができるのである。そうした人間性を追求する気持ちでこの小説を読まなければ自ら偽善者である自分に気づくのである。

## 註

Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Harmondsworth: Penguin Books, 1985) をテキストとして使用した。作品からの引用は、引用文に続き括弧内のローマ数字でそれを示した。

1. Charlotte Brontë, “Editor’s Preface to the New [1850] Edition of *Wuthering Heights*” in *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Harmondsworth: Penguin Books, 1985), p.40.
2. W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (London: Mercury Books, 1963), p.231.
3. ジョルジュ・バタイユ, 『文学と悪』, 山本功訳 (東京: 筑摩書房, 1992年), p.11.
4. ルソー, 『エミール』(上), 今野一雄訳 (東京: 岩波書店, 1988年), p.23.
5. 岡田忠軒, 『「嵐が丘」の世界を求めて—ブロンテ姉妹研究—』, (東京: 桐原書店, 1980年)  
岡田氏は, 上記の書, 『嵐が丘』(4)の中でIsabellaの俗世間を指摘している。氏の意見を参考にした。
6. Arnold Kettle, “Emily Brontë: *Wuthering Heights*” in Thomas A. Vogler (ed.), *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights: A Collection of Critical Essays* (New Jersey: Prentice-Hall, 1968), p.38.  
彼は, “The weapons he uses against the Earnshaws and Lintons are their own weapons of money and arranged marriages”と“money”について指摘している。筆者は, 金は両家を限定するのではなく世間一般が求めるものとし, 俗世間の観点から論じた。
7. Terry Eagleton, *Myths of Power—A Marxist Study of the Brontës* (London: Macmillan, 1975), p.104.

## Heathcliff 論 2

8. David Cecil, “Emily Brontë and *Wuthering Heights*” in Eleanor McNees (ed.), *The Brontë sisters: Critical Assessments* (Mountfield: Helm Information, 1966), Vol.2, p. 117.
9. バタイユ, pp.11–12.
10. Eagleton, p.103.
11. 中岡洋訳, 『エミリー・ジェイン・ブロンテ全詩集』, (東京:国文社, 1991年), pp.298–300. 157 「なんと皓々と月は照ることか！」より引用。
12. 拙論「Heathcliff論—その人生が意味するもの—」, (「中京英文学」第20号, 2000年)
13. Eagleton, p.102.